ろう教育における
ろう者観・言語観の変遷
～欧米を中心に～

榧　陽子（かや　ようこ）

１）紀元前からルネッサンスまで

紀元前にはすでにろうあ者について述べたものが見られます。

アリストテレス（紀元前４世紀）は、「言葉は生まれつき備わっている能力であるから、ろうあ者に言葉を覚えさせることはできない。」と言っていました。しかも、「神の失敗作なので、我々人間にはどうしようもない。」とも言っていました。

また、医聖といわれているガリヌス（２世紀、人間の身体を解剖して、身体の仕組みを明らかにした人）も、「聴覚と言語中枢は一体である」という誤った見解を出していました。

一方、ローマ帝国のアウグスティヌス（４～５世紀）は、「耳が聞こえなくても身振りで立派に会話できるではないか。」とろうあ者も言語能力があることをほのめかしていましたが、世間ではろうあ者は身振りしかできないというふうに誤解されていました。

アリストテレスもガリヌスも高名な学者であり、中世を経て近代に至るまで、「ろうあ者は言語をもたない」という彼らの説が信じられてきました。

教会においても、ろうあ者は言語をもたないから、神のことばを聞くことができず、伝道の対象外とされていました。（後にはろうあ者などの弱者の保護を訴え、救済を積極的に行いました。）

一方、医学の世界では、ろうは病気であると考えられており、騒音による治療や耳の浄化剤として様々なものを詰め込む治療などが行われていました。

２）ルネッサンス期（１３世紀末～）

時は移って、ルネッサンス。
ルネッサンスでは、神や聖書を中心とした見方から、人間や自然をありのままに見ていこうとする見方へ変わっていきました。ろうあ者に対する見方も徐々に変わっていきました。

レオナルド・ダ・ビンチ（イタリア）
「アリストテレスの説は変ではないか。ろう者も身振りを使えば言うことを理解できる。ろう者は決して失敗作ではない」

ジェローム・カルダン（イタリア）
「ろう者は言葉をきくことはできないが、書かれた言葉を物や物の絵に結びつけることによって、教えることができる。」

このように、ろう者でも言葉をもつことができると述べる人が現れてきました。

それは、ルネッサンスになって、言語の本質について見直されるようになったことと関係があるでしょう。長い間、「言語＝話し言葉」と思われていましたが、ルネッサンスになって、「言葉には発声がなくても、サインや身振りなどで伝達できるのではないか」と問われるようになったのです。

また、ルネッサンスでは、書記文化が発展しました。本が普及し、人や物の流通が活発になって都市が発展し、読み書きができないと不利な状態になっていきました。

読み書きの発達は、後になってろうあ者に読み書きを教えようという試みを促すことになりました。

医学では、ソロモン・アルベルティというドイツ医師が「聴力と発声は別個の機能である」と述べました。

3）ろう教育の個人的試み（１６世紀半ば～）

世界で初めてろう児に教育を行ったのは、ポンセ・ド・レオンというスペイン修道僧だと言われています。スペイン貴族のろう児の家庭教師を頼まれ、文字と物を使って、読み書きと発音を教えました。

その頃のスペインは最も繁盛していたときであり、裕福なスペイン人は、ろう児に家庭教師をつけるようになりました。
・ろう児にも財産を相続させるため
・信仰告白によりキリスト教徒にさせるため
が目的でしたが、「ろう者でも言語をもつことができる。神の救いからもれない人間である」ことを実証してやろうと奮発した教師もいました。

カトリックの修道僧の間では、話すことが禁じられていたため、手文字を使ってコミュニケーションしていました。